

エネルギーシステム・要素論

第6回 電池2

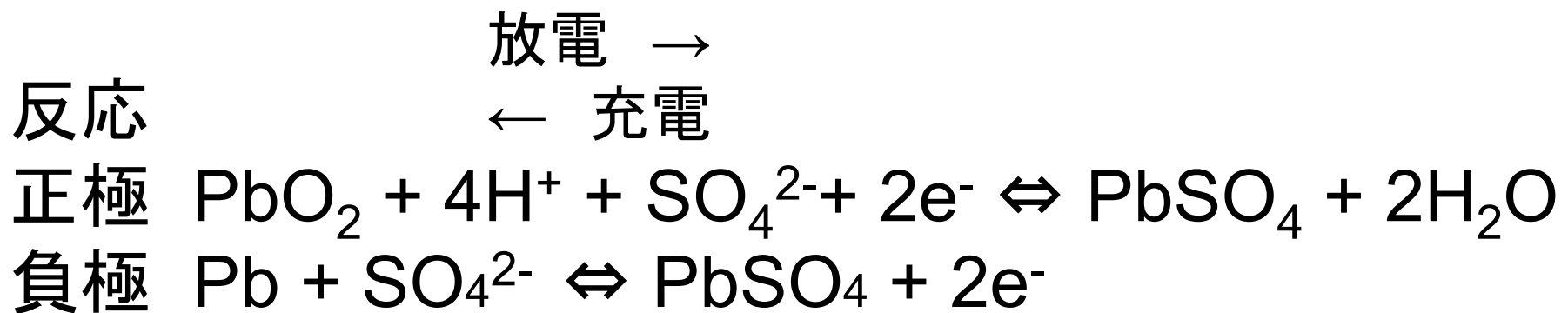
燃料電池および

二次電池のモデル化

2021年5月21日

鉛蓄電池

- ・ 正極 二酸化鉛
- ・ 負極 鉛
- ・ 電解液 希硫酸
- ・ 電圧 2V
- ・ 安価
- ・ 重い
- ・ 大電流放電可能
- ・ メモリー効果無し
- ・ サルフェーション(負極板表面に硫酸鉛結晶が発生)

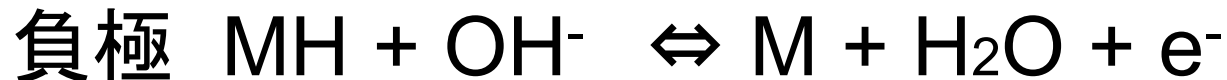
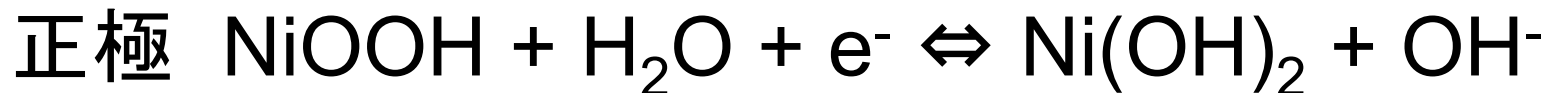


ニッケル水素二次電池

(NiMH: Nickel metal hydride)

- 正極 水酸化ニッケル
- 負極 水素吸蔵合金
- 電解液 水酸化カリウム水溶液
- 電圧1.2V
- 用途
 - ハイブリッド自動車
 - 電池の安全性
 - トヨタ, ホンダ
 - デジカメ
 - おもちゃ
 - ラジコン

反応



M:水素吸蔵合金, MH:金属水素化物

放電 →

← 充電

ニッケル水素二次電池

(NiMH: Nickel metal hydride)

- NiCd電池との比較
 - ニカド電池より容量密度が高い
 - カドミウムを含まない
 - 自然放電が多い
 - メモリ効果
 - 過充電に弱い
- リチウム電池との比較
 - 大電流時放電特性に優れる
 - 単純な回路で充放電が可能
 - 安全性

リチウムイオン二次電池

- 構成(様々あるので下記は例)
 - 負極 炭素等
 - 正極 リチウム遷移金属
酸化物
 - 電解質 有機溶媒(炭酸エチレン,炭酸ジエチル)+リチウム塩(六フッ化リン酸リチウム)
- 高い電圧
 - 高いエネルギー密度
 - 短絡時には急過熱, 発火
 - 保護回路必要
- メモリー効果小さい
 - 継ぎ足し充電
- デンドライトが析出しない
- 満充電状態保存で電池が劣化
- 充放電制御が必要
 - 過充電
 - 負極側に金属リチウム析出
 - 正極の酸化状態が高まって危険な状態になる
 - 過放電
 - 正極のコバルト溶出
 - 負極の集電体の銅溶出
- 1990年旭化成, ソニーが実用化
- 1998年リチウムイオンポリマー電池(ゲル状ポリマー電解質)
- 日本メーカーのシェアが高い
 - 最近では中韓にやられてる
- 小容量機器から大容量機器へ

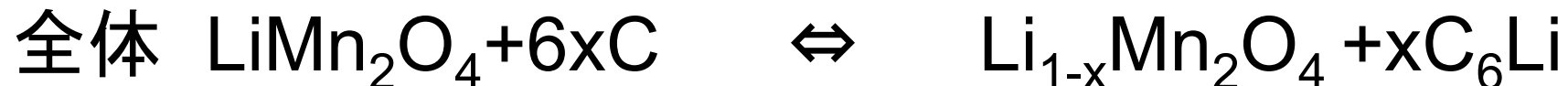
リチウムイオン二次電池

反応

コバルト酸リチウム正極 (約160mAh/g)

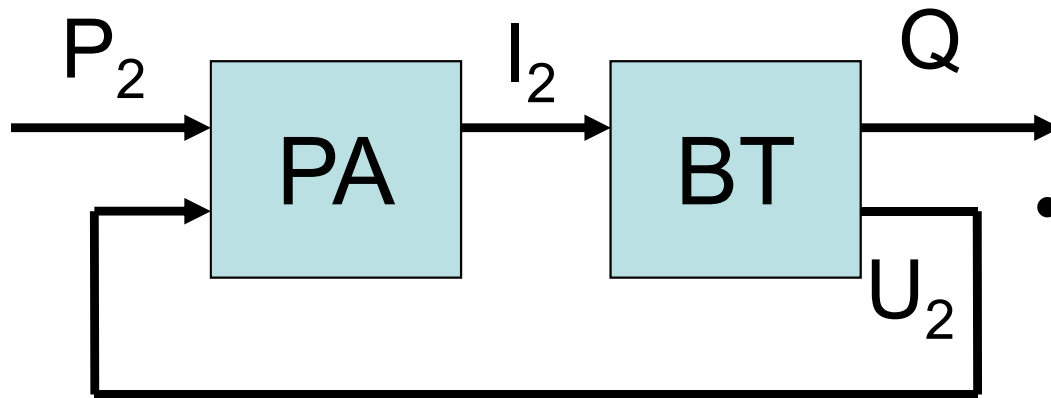


マンガン酸リチウム正極 (約130mAh/g)



二次電池の準定常モデル1

BT:二次電池反応
PA:内部変数変換



- 入力変数
 - 端子出力電力 $P_2(t)$
- 出力変数
 - 電池の電荷量 $Q(t)$
- 内部変数
 - 端子電圧 $U_2(t)$
 - 端子電流 $I_2(t)$

$$I_2(t) = \frac{P_2(t)}{U_2(t)}$$

二次電池の準定常モデル2

- 電池の容量はAhで表す
 - 定電流の充電・放電で評価
 - 定電流放電試験
 - 満充電時 開放端子電圧Uoc
 - 放電終了電圧まで定電流I₂で放電 (例Uocの80%)
 - 放電時間t_f
 - 依存関係はPeukertの式で表される

$$t_f = \text{const} \cdot I_2^{-n}$$

- n:ポイカート指数
1~1.5(鉛電池で1.35程度)
- 電池の容量は充放電電流に依存する

二次電池の準定常モデル3

- 放電電流 I_2^* に対する容量 Q_0^*
 - 放電電流が異なると容量も変化する

- 非線形性

$$Q_0^* = I_2^* t_f^* = I_2^* \cdot \text{const} \cdot I_2^{*-n} = \text{const} \cdot I_2^{*1-n}$$

$$Q_0 = I_2 t_f = \text{const} \cdot I_2^{1-n}$$

$$\frac{Q_0}{Q_0^*} = \frac{\text{const} \cdot I_2^{1-n}}{\text{const} \cdot I_2^{*1-n}} = \left(\frac{I_2}{I_2^*} \right)^{1-n}$$

- 修正Peukert式
 - K_c :定数

$$\frac{Q_0}{Q_0^*} = \frac{K_c}{1 + (K_c - 1) \left(\frac{I_2}{I_2^*} \right)^{n-1}}$$

二次電池の準定常モデル4

- 電池の容量の表現

- Cレート

- 1Cレート

- 電池の全容量を一時間で充放電する電流値

- 自動車用では100Cレート(1/100時間で放電)で評価するのが一般的

- 電池容量 Q_0 (Ah)

- 放電電流 I_0 (A)

$$c(t) = \frac{I_2(t)}{I_0}$$

$$I_0 = \frac{Q_0}{1}$$

- $C=1/x$ で表す

- $x(h)$ は電池を放電するのに要する時間

二次電池の準定常モデル5

- 充電状態(SoC: State of charge): $q(t)$
 - 定格電池容量 Q_0 に対する出力可能な電荷量の比

$$q(t) = \frac{Q(t)}{Q_0}$$

- 電荷残量 Q は通常測れない
 - 電荷量変化と放電電流の関係

$$\dot{Q}(t) = -I_2(t)$$

- 充電電流は全部充電電荷とはならない
 - 充電損失

$$\dot{Q}(t) = -\eta_c I_2(t)$$

- η_c :クーロン効率